『顕浄土真実教行證文類』（坂東本）の特徴についての予備的考察

――専修寺本・西本願寺本との比較を通して――

藤元雅文

はじめに

『顕浄土真実教行證文類』（坂東本）（以下、「坂東本」と称す）における総合研究が何故必要なのか。あるいは、そのような研究によって、今までの親鸞の思想理解が大きく展開する可能性は存在するのか。この問いに対し、「坂東本」それ自体から、どのように答えることができるのかということが小論の課題の根底にある。この課題に対して、小論はあくまで準備的な内容にとどまるが、「坂東本」と「専修寺本」、「西本願寺本」との具体的な相違という点から、「坂東本」の特徴を改めて考えてみたいと思う。

ここではまず、簡略に「坂東本」、「専修寺本」、「西本願寺本」についての概要を述べておきたい。

「坂東本」は、親鸞の主著『顕浄土真実教行證文類』（以下『教行信証』と称す）の中で現存する唯一の自筆本であるとともに、六十歳頃から最晩年に至るまで、親鸞が手元に置き、手を入れ続けた親鸞所持本である。この形態については、後にやや詳しくふれることとする。

「専修寺本」は、長らく親鸞自筆本、清書本として伝えられてきた。が現在では、親鸞八十三歳の時に門弟の専海が

書写した『教行信証』を、更に真仏が書写したものと考えられる。[1] つまり、親鸞の直弟書写本である。

また、「西本願寺本」は、「専修寺本」と同様に、親鸞の自筆清書本として伝えられてきた。が現在では、一部切り取られている箇所に親鸞滅後十三年の文永十二（一二七五）年書写の奥書が「西本願寺本」にはあったと考えられており、その奥書と本文を同筆と見、文永十二年書写本と考える人が少なくない。[2] 形態としては「坂東本」を含め、いくつかの異本による校訂を含めた親鸞入滅後の書写本である。

この三本について、坂東本の中に見られる具体的な特徴の中から、これまで充分には省みられてこなかったと思われる「四声点」、「合点」、「改行」、「朱書き」という点を取り上げ、それぞれについて、「坂東本」、「専修寺本」、「西本願寺本」の状態を概略的に確認していきたい。三本における語句の校異については、すでに様々な研究成果が存在しているので、ここでの言及は避けるが、この三本の比較から、どのような課題が明らかになるのかを、最後にふれたいと思う。

一　「坂東本」の形態について

「坂東本」の形態については、すでに多くの研究成果が発表されており、[3] また、二〇〇五年には、「坂東本」のカラー影印本が出版されたことによって、非常に鮮明にその状態を見ることができるようになった。それらの内容から、「坂東本」が次のような形態を持っていることが分かる。

① 用紙を冊子にするための綴じ方に、幾つかのバリエーションが存在する。

② 親鸞の年代による字体の変遷が存在する。

③ 一頁の行数に変化がある。おおよそ「八行書き」の箇所は、六十歳頃前後、「七行書き」の本文は、八十四歳頃と推測できる。

④ テキストの校訂を示す注記が存在する。

⑤　朱記が存在する。
⑥　「合点」様の記号が存在する。
⑦　右訓・左訓・四声点が存在する。
⑧　紙の切り張りによる文字の追加、削除などが存在する。

このような「坂東本」の形態によって、私たちは『教行信証』執筆時の状況を詳細に知ることができる。既に指摘されているところであるが、「坂東本」における訂正・補記などの存在は、それが未完成であることを示すのではなく、ほぼその最晩年にまで及ぶ親鸞の思想的営みを示すものであり、親鸞による読み込みの跡を確認することができる貴重なものである。これまでの『教行信証』研究において、確かに「坂東本」は親鸞自筆本として広く認められてきた。しかし、「坂東本」それ自体を通して、つまり「坂東本」に確かめられる親鸞の思想的な営みそのものを通して、『教行信証』という著作を考察していくことが十分になされてきたかというところに大きな課題がある。

小論では、繰り返しになるが、そのような課題を考える準備的な内容として、右に挙げた坂東本の形態の中から「四声点」、「合点」、「改行」、「朱書き」という点について、三本の概略的な比較を示し、そのことを通して、「坂東本」が持つ特徴を考察する視座をえたいと思う。

二　四声点について

四声点とは、音を表示する記号であり、もともとは漢字の四声（平声、上声、去声、入声）を指示するものであることは広く知られている。しかし、親鸞が『教行信証』において、四声点をつけていることの意義は、様々に考察されねばならない点が存する。

まず、親鸞が付した四声点は実際にどのような音を示しているのかということである。この点については親鸞自身が、

四声点の内容について書き記しているものが残されている。それは、『観阿弥陀経集註』の冒頭、『唯信鈔』（西本願寺蔵）の冒頭に見られ、[4] また親鸞の真蹟ではないものの、直弟の書写と考えられる『浄土高僧和讃』の冒頭にも記されてある。[5] その内容は中国語の純粋な音というより、仏典の言葉を音読する際にどのように発音するのかについて、当該の漢字を読む人に伝えるように意識された内容となっている。このような四声点に対して親鸞が書きとどめている内容から、親鸞自身が「坂東本」に付した四声点の内容と、漢字の読み方を推定することができる。このように漢字をどのように読むのかについて親鸞が非常に深い配慮をもっており、四声点を付すという親鸞の営みは、聖教の一文字一文字を忽（ゆるが）せにしない『教行信証』撰述の姿勢を示すものとも考えられよう。

また、漢字の読みは、その漢字の意味とも深く関わっている。その点に関して、例えば「坂東本」における「仁」の四声点を見てみたい。「坂東本」の「総序」および「行巻」に出てくる「仁」はいずれも、圏発の「○」がその左下に記されている。[6] それに対し、「化身土巻」の『弁証論』に記される「仁」については、すべて漢字の左下に、「○」と「一」から成る圏発がふされている。[7] この四声点の相違は、読みの相違のみが意図されているのではないと言える。なぜなら、「仁」とは特に儒教において強調される中心概念であり、『弁証論』は仏教と、儒教、道教との内容が課題とされているのであるから、読みの差異を明確化することによって、その意義内容をも厳格に区別していると見ることができるからである。

このように、親鸞が『教行信証』において四声点を付していくという営みは、読みの明確化とともに、意味の明確化という内容をも有しているという視点が成り立つのである。

では、「三本」の四声点についての概要を見ておきたい。

まず「坂東本」には、すべての漢字に、四声点が付されているわけではなく、頁によって、その密度に大きな差がある。つまり、すべての漢字の読みを示すというのではなく、いくつかの漢字に圏発が付けられていくのである。その取

捨選択の理由については、先ほど触れた同じ漢字であっても異なる読みによって異なる意味を明確化するため、或いは難読のためなどが考えられようが、これについての厳密な考察は別の機会にしたい。

「専修寺本」は「坂東本」の状況に比べると、四声点の数が全体として、かなり少なくなっている。ただし、「坂東本」には四声点がついていない漢字に、圏点が存在する例がある。例えば、「教巻」の最後の御自釈にある「（一乗究竟之）極説速疾圓融之金言」に「坂東本」には四声点は存在しないが、「専修寺本」には圏発が存在する。[8] また、「専修寺本」の四声点についての特徴として、全体としての数は少ないのにもかかわらず、特定の漢字、例えば「心」という言葉について、繰り返し圏点が付けられていくということがある。これについても速断は許されないが、敢えて「心」に対する圏発が繰返されるということは、単なる音の表記というより、引用文におけるキーワードに圏発を敢えて付けているのではないかと考えられる。また、これは親鸞自筆の『大般涅槃経要文』においても同様な傾向を見出すことができ、その理由についても考察すべき課題である。

「西本願寺本」の四声点については、坂東本と非常に近い形になっており、可能なかぎり「坂東本」および参照している異本を書き写そうとする姿勢が明らかに見て取ることができる。また、「専修寺本」同様に、坂東本にはついていない四声点が付けられており、先述した「教巻」の御自釈の「（一乗究竟之）極説速疾圓融之金言」には「専修寺本」と同様の圏発が付されている。こうした点を踏まえて「西本願寺本」の四声点について全般的に見てみると、「坂東本」を中心にしながら、異本の内容も照らし合わせて、可能な限り詳細に四声点を書写していることが分かる。

三　「合点」様の記号について

「合点」様の記号については、三木彰円「坂東本・教行信証と親鸞」において、その重要性が明確に指摘されている。その内容を以下、少し長くなるが、引用したい。

これらの書き入れの性格について、「坂東本」全体を通してまず確認できるのは、本文の右あるいは左に引かれる棒線は、本文における重要な語句に対して記されている状況が多く見られるということです。それらの棒線は本文の右あるいは左のいずれかに記される場合もあれば、左右両方に記される場合もあります。また一つの要文と次の新たな要文とが始まる区切りにあたる位置、あるいは一つの要文における文脈上の区切りに関わる箇所に記されている状況も見られます。

それらの棒線の状況を踏まえて上下の余白に記される「⋀」や「∧」の記号を見ていくと、それらの記号が記された直下の本文、あるいはそれに近接する本文に棒線が記されている箇所を多く確認できます。つまり「⋀」や「∧」の記号は、本文、あるいはそこにある語句に注意を払うべき事柄（棒線記入箇所）があることを示すために記されたものとして考えることができます。[9]

この指摘を踏まえて、まず「専修寺本」の状況を見ると、まず言えることは、数の点で圧倒的に少ないということである。部分的に「坂東本」の「合点様」の記号を書写しているのではないかと見られる箇所が存在するが、[10]「坂東本」とは異なる箇所に、合点様の記号を付している場合が、ほとんどである。また、「化身土巻」において、「坂東本」の合点を一度書写し、その上で、その合点を薄くしていると見受けられる箇所が存在する。[11]そうすると、合点に関して「坂東本」の内容を「専修寺本」にそのまま書き写そうという意識はほとんどないということができるのではないか。

西本願寺本では、四声点に関しては可能なかぎり「坂東本」を中心として、その他の異本を書写しようとする姿勢が見える反面、合点様の記号については、その数そのものが極めて少なく、また「坂東本」の合点用の記号を書写しようという姿勢は見受けられない。[12]また、「西本願寺本」には、「坂東本」や「専修寺本」にはない経言を表す「∴」、論釈を示す「：」、要文の区切りを示す「•」という記号が存在する。従って、合点に関しては、その位置づけそのものが「坂東本」と「西本願寺本」では大きく異なっていると考えられる。

更に、「合点」様の棒線がある親鸞のその他の著作を挙げておくと、『唯信鈔』（西本願寺蔵）、『尊号真像銘文』（正嘉本）、『観阿弥陀経集註』、『浄土論註』（加点本）、『見聞集』、『大般涅槃経要文』がある。「坂東本」以外の親鸞の自筆本における「合点」様の記号の意義や、合点を含む著作と含まない著作の位置づけなどを含めて、更に研究を進める必要がある。

四　改行について

「坂東本」における改行の仕方は一様ではない。外見上、改行と見える箇所であっても、例えば偈頌を引文する際に見出されるような、意味の区切りを与える改行ではない箇所が存在する。一方で、例えば、「信巻」の引文のはじめに『大経』『如来会』の文を引き、その後『論註』の引文に移る箇所で、一旦行を改めて書き、『如来会』の引文の終りを示す「抄出」から「論註曰」の書き出しの所に圏と線とを書き加えて、引文が続いていることを明瞭に指示している箇所が[13]ある。この箇所では、親鸞がわざわざ改行について補正しているのであり、行改めに対する親鸞の配慮を示唆している。また、「信巻」や「化身土巻」における三つの問答の冒頭、或いは所謂「後序」の冒頭の箇所のように、一行程のスペースを伴った改行も「坂東本」には存在する。従って、同じ改行という形であっても、その理由や状態が複数存在することを確かめておく必要がある。[14]

「専修寺本」は、「坂東本」と比べると改行の場所が若干多いが、必ずしも「坂東本」と同じ箇所で改行がなされているわけではない。また、先ほど指摘した「坂東本」にみられる一行あけての改行の箇所は、「信巻」においては、「坂東本」と同様であるが、「化身土巻」ではまったく意識されていない。ことに「化身土巻」の第二問答にはおいては、空欄はあるが、改行そのものが行われていない。

それに対し「西本願寺本」は、二本とは対照的に改行の箇所が非常に多い。読む側にとっては非常に見やすく書写が

なされている。一方で、一行あけの改行などは意識されていないことも見て取ることができる。「西本願寺本」における改行は、書写者の意図によって明確に規定されており、「坂東本」の改行を書写しようという姿勢は見出されない。

また、改行については、『教行信証』の各巻の構成を親鸞自身がどのように考えていたのかという課題において言及されることがあるが、それは「坂東本」の状態を考えると、慎重に考察しなければならない問題である。少なくとも「坂東本」における改行の状態は、すべてを同一の内容としては捉えられないこと、「専修寺本」や「西本願寺本」においても、改行に対する姿勢は必ずしも一貫していないことを指摘しておきたい。

五　朱書きについて

「坂東本」の朱書きの内容は、送りがな、返り点、語句、圏点などの追加、訂正である。「坂東本」では、既に指摘がなされているように、第一冊の「教巻」においては、一箇所のみ、また「行巻」前半の「七行書き」部分には朱書きを見ることはできず、八行書きの箇所になって、はじめて朱書きを見出すことができる。[15] また、第二冊以降、第六冊まで、朱書きの数には、相違があるものの、全ての冊に朱書きの存在を確認できる。また、朱書きの具体的な内容とその意義について、先にも引用したが、三木の論文において明確に指摘されている。[16] その要点をまとめると、まず、「坂東本」における朱書きは、『教行信証』の要文における校異や要文の連続性の確認・確定の作業を示すものと、訓点に施される朱記とに大別できる。更に訓点に見られる朱記には、①語句の意義を朱記するもの、②漢文に送り仮名を朱記するもの、③墨筆で記した訓点や本文に、念を押すように朱筆を重ねていくものという三つがあることを明確に指摘している。

このような坂東本の状態に比して、専修寺本には、ごくわずかではあるが、朱書きが存在する。その内容は右訓、左訓、返り点の追加・訂正、本文の校異、句点の追加、願名の補記、合点などに亘る。つまり、数は極めて少ないものの、朱記の役割は、先述した「坂東本」における朱記の内容とほぼ重なっていると言ってよい。ただし、「坂東本」の朱記

を、「専修寺本」にそのまま朱で写す箇所は、一箇所も見あたらない。[17] つまり、朱の役割が重なる所はあっても、「坂東本」の朱記を「専修寺本」は墨で書写しているのであって、「坂東本」における朱記の位置づけやその意義内容が、そのまま「専修寺本」の朱記と同様であると言うことはできない。

西本願寺本は、送りがな、返り点、四声点、右訓、左訓、頭註、合点様の記号など本文以外は、すべて朱書きであり、明らかに、「坂東本」、また「専修寺本」とはその位置づけが異なる。「西本願寺本」の書写者の意図から、墨書と朱記との位置づけと意義内容を明らかにする必要がある。

おわりに

大変粗々とした内容である。ここでとりあげた全ての点が、いわばこれからより厳密に明らかにしなければならない事柄を指摘するだけであるが、最後に小論を通して大きな課題となったことを記しておきたいと思う。

それは一言で言えば、「坂東本」に学ぶということはどういうことなのか、ということである。この三本の比較を通して改めて明確になることは、直弟書写本であれ、親鸞滅後最も近い時期に書写された本であれ、そこには書写する者の一定の取捨選択や意図が反映せざるを得ないということであった。それは親鸞自筆の「坂東本」と、書写本との間には不可避的な相違が存在するということへの明確な自覚を迫るものである。だからこそ、「坂東本」との比較によって、それぞれの書写本がどのような傾向を持ち、何を念願しながら書写されたのかということを明らかにすることが大切な作業ともなる。

小論においては「坂東本」の形態的な特徴から、「専修寺本」「西本願寺本」との関わりを見てきたが、『教行信証』を受けとめ、伝えてきた先達の営みとして『教行信証』の書写本が残されているということは決して軽くない。そのことを踏まえつつ、その上で、親鸞自身の語句の意味の確かめや、本文の改定、或いは文言の読み込みの跡をたどることが

できる「坂東本」に学ぶとはいかなることなのか、また親鸞の真宗開顕の営みである「坂東本」に学ぶために、どのような研究のアプローチがあり得るのか、考え続けていきたい。

註

1 平松令三『親鸞真蹟の研究』（法蔵館、昭和六三年）八九～一一二頁。

2 宮崎円遵『『教行信証』考証』（講談社、昭和五一年）二六～七頁。

3 赤松俊秀「教行信證の成立と改訂について」（『続鎌倉仏教の研究』所収）、重見一行『教行信證の研究』、三木彰円「『坂東本・教行信証』と親鸞」（『真宗』（真宗大谷派宗務所出版部）所収　二〇〇七年八月～二〇〇九年六月）を参照。

4 『増補親鸞聖人真蹟集成』第七巻一頁。後掲図1参照。
また、『唯信鈔』（西本願寺蔵）の冒頭（『増補親鸞聖人真蹟集成』第八巻一〇頁）参照。

5 『浄土高僧和讃』（『増補親鸞聖人真蹟集成』第三巻、一四四頁）後掲図2参照。

6 『増補親鸞聖人真蹟集成』第一巻、一一頁五行目と、一〇四頁三行目。（両者とも多少、見分けにくいが、前者については「専修寺本」と「西本願寺本」の二本に同様の圏発が付されている。）

7 『増補親鸞聖人真蹟集成』第二巻、六五一頁四行目及び、六五二頁一行目と六行目。

8 『専修寺本　顕浄土真実教行證文類』上巻、二一頁。

9 「『坂東本・教行信証』と親鸞」「坂東本の形態⑦」（『真宗』二〇〇八年一〇月）

10 「信巻」「菩提心釈」（『増補親鸞聖人真蹟集成』第一巻、二二五頁と、『専修寺本　顕浄土真実教行證文類』上巻　二五〇～一頁）

11 『増補親鸞聖人真蹟集成』第二巻、五一七頁と、『専修寺本　顕浄土真実教行證文類』下巻、五六三頁を参照。

12 例えば、「信巻」三一問答の「本願欲生心成就文」という文言の「本」の上に、朱記されている。或いは、「後序」における「彼仏今現在成仏」の「彼」の上に、合点用の記号が記されている。この部分には、「坂東本」「専修寺本」両方共に、合点は存在しない。

13 『増補親鸞聖人真蹟集成』第一巻、一六五～六頁。

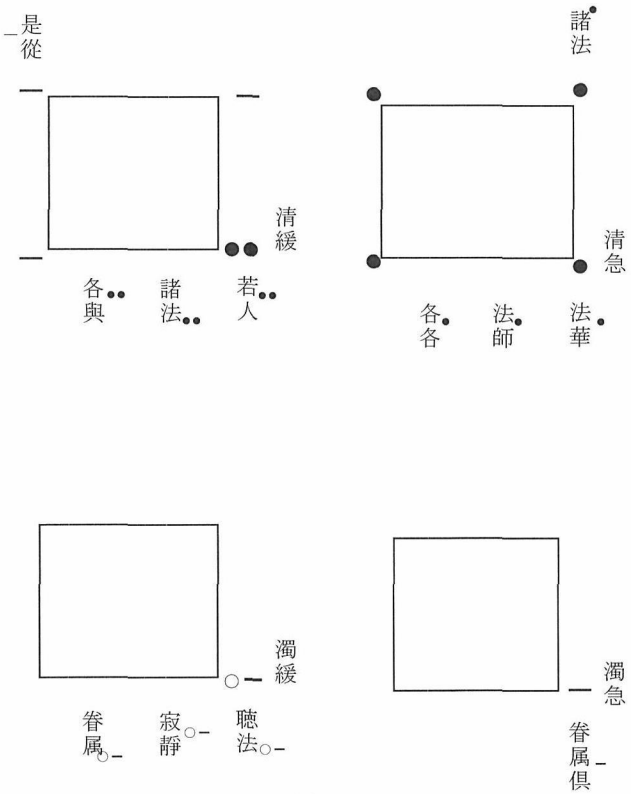

図1

14　「顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本　解説」（四四頁）によると、「化身土巻」の第一問答の直前で用紙が切り開かれていると指摘されている。切り開かれた前の書写の状態やその時期などは問題となるが、一行分程の空間が空けられて改行されていることは、現状の「坂東本」において明確に見て取ることができる。（『増補親鸞聖人真蹟集成』第二巻、四八七頁）

15　多屋頼俊「坂東本の朱筆」（『増補親鸞聖人真蹟集成』第一巻、六九六頁）

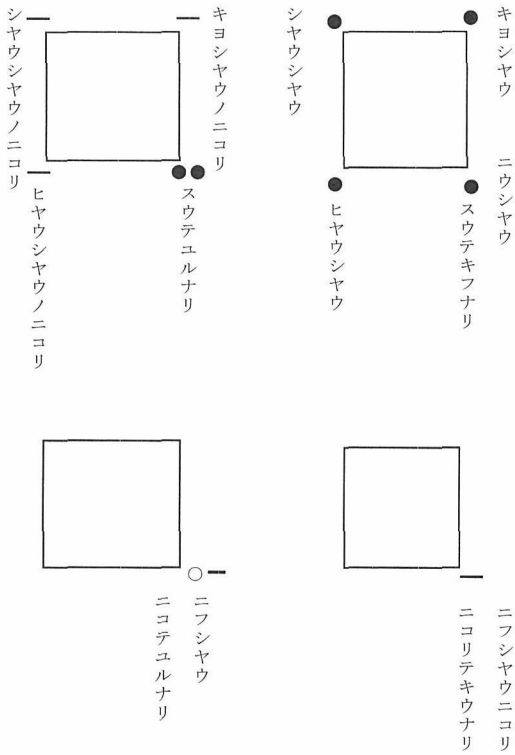

図2

16　三木彰円「『坂東本・教行信証』と親鸞」「坂東本の特徴②」「同③」（『真宗』二〇〇七年一二月、二〇〇八年一月）

17　ただし、敢えて言えば、「行巻」の慈雲の引文において「坂東本」では、「得臨終離諸怖畏身心安快衆聖現前授手接引」の最初の「得」に「二」の返り点を、最後の「引」に「一」の返り点を、墨書し、その上から重ねて朱記がなされている。一方、「専修寺本」における当該箇所は、「一」「二」点を薄くして、「上」「下」の点が朱記されている。